

R2. 7. 31(金) №.19 小柳 弘志

熊本県に、日本に、南阿蘇から自分の考えを発信してみませんか？

例年なら夏休みを今週から迎えている時期です。この時期には小、中学生に対して絵画であったり、習字であったり、作文であったり、創作物であったり、いろいろな応募があります。夏休みの宿題として取り組むこともあります。今年もいろいろな応募がありますが、夏休みの期間は短いですがチャレンジしてみてはいかがでしょうか？みなさんの中学生らしいみずみずしい感性を社会に発信してみませんか？（入賞した人にはすごい表彰がある募集もあるようです。）

今年、南阿蘇中に来た私には地域の良さやそこに暮らす人々の良さ、みなさん中学生の良さが新鮮なものとして伝わっています。みずみずしい感性を持っていると思います。南阿蘇は「水の生まれる里」であり、広報誌に載っているように「ただのいなかじやーなかよ」です。

以下熊本県のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/kiji_32467.html）に掲載してあったものを紹介します。

※ 裏面には「ざぶん賞」の過去の作品を載せています。

応募件名	募集作品	応募締切日
「心の輪を広げる体験作文」及び 「障害者週間ポスター」等の募集	作文又はポスター	令和2年9月2日（水）
「ざぶん賞2020（第19回）」の作品募集	水に関する内容の作文・童話・詩・手紙	令和2年9月7日（月）
「河川愛護月間」作品募集	絵手紙	令和2年9月30日（水）
「土木の日」作品募集	絵画・写真コンクール	令和2年9月30日（水）

他にもたくさん応募があります。その都度、担当の先生方からお知らせがあります。

「だれだって いつだって 感染しうるから」再度、実践強化を

熊本県でも新型コロナウイルス感染者が7月26日（日）から急激に増加しています。学校では留意することを「チェック表」で確認し、再び、臨時休校にならないように生徒と先生方で取り組んでいます。ご家庭でもお子様と一緒に、自分と自分の大切な人を守るために、ここでもう一度、感染症対策ができているか確認してください。子どもたちがご家庭に「チェック表」を持って帰りますので、「チェック表」の最後に確認のサインをお願いします。その後、担任に返却してください。

○家庭へのお願い

- ①発熱、風邪症状、倦怠感、息苦しさ等を学校で確認した場合は、安全に帰宅させ、症状がなくなるまでは自宅休養になります。すぐに連絡のとれる緊急時連絡先を担任にお知らせください（担任がお尋ねするかもしれません）。
- ②次の症状がある場合は、熊本県新型コロナウイルス感染症専用相談窓口（096-300-5909）か阿蘇保健所（0967-24-9030）に相談されてください。
 - ・息苦しさ（呼吸困難）、強いだるさ（倦怠感）、高熱等の強い症状がある場合
 - ・発熱や咳など比較的軽い症状が続く場合（4日以上は必ず）
 - ・基礎疾患があり、発熱や咳などの比較的軽い風邪の症状がある場合
- ③保健所等に相談したことや、病院の診断結果は学校（担任）に連絡してください。
- ④県内で感染者が急増しているので、当分の間、不要不急の外出はお控えください。また、家族以外での人が多く集まる場所での飲食等はできるだけお避けください。ご協力をよろしくお願ひいたします。

ぼくと風呂

阿部 豊

中学1年生の作品です。
※重ねた経験のとらえ方が素敵です。

プロの方々が装飾しアート
作品に仕上げられます。



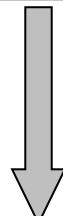
中学2年生の作品です。
※独創的な作品づくり、読者を惹きつけます。

プロの方々が装飾しアート
作品に仕上げられます。



中学2年生の作品です。
※体験を通して考えた未来への
想いが伝わってきます。

プロの方々が装飾しアート
作品に仕上げられます。



今日は僕は風呂に入る。風呂に入りながら、いつも僕は考へとをする。今読んでいる本の結末はどうなるか、学校で学んだこと、友達と話したこと、その日に心が動かされたこと。風呂は僕にとって、自分の心を振り返り、リラックスする場所だ。今は、こんなにリラックスできる場所だが、風呂に入り始めた小学生の僕、風呂は肝試しの場所だった。髪を洗っている時は、鏡に幽霊が映ついたらどうしようか常に恐怖と向き合っていた。おびえたながらタオルで顔をふき、何もないところから心臓がよくはれていたことを思い出す。もと小さい頃、風呂は最高の遊び場だった。魚のおもちゃを泳がせ、やり遊びした風呂が大きな海になり、港になり、僕は、最高の一本釣り師だった。

風呂は、僕の想像を広げる場所だった。いろいろな物語や僕だけが知るキャラクターが生まれた。風呂は、修行の場所でもあった。僕は、ずっともぐらることができなかったので、小学一年生の水泳記録会は、ビート板にしがみつき、みんなからなり遅れて、バタ足で怎とがゴールにたどりついた。その日から、風呂にもぐる修行が始まった。この修行は、辛かつた。ブールの授業がある時は、真剣に修行に取り組んだが、冬になると旅行を忘れることがすらあり、この修行は、三年の月日が流れた。修行のかななく、結局僕は、スイミングスクールに通わさせられることになり、この修行の何倍も早く、長い距離を泳ぐことができるようになつた。

風呂が実験室になつたこともある。小学一年生の夏の自由研究は、牛乳パックを作った船を連く長く進ませる「はこうしたらしい」かを実験した。ストップウォッチで時間を計り、スク里ユーについたゴムの巻き方を変えたり、ゴムの数を変えたり、風呂ごともつて科学者のように実験した。この実験は、地区の理科作品展で最優秀となる快挙を成しげた。こんなにいはは、この時だけだったが、おかげで僕は、理科の自由研究が好きになり、夏が来る度に、理科の自由研究に取り組んだ。僕の心の原点は、風呂にある。

おぼれたり、こけたり、頭をぶつけたり、シャワーが思い切り顔にかかるつたり、つらい時に涙が出てきて、風呂から上がる時に必死に顔を洗つてこまかしたり…。風呂での悲しい思い出もある。しかし、風呂から上がると、湯気と一緒に悲しまるどんていつてしまふ気がする。僕は、風呂に助けられ、風呂に成長してきた。

去年の冬は、風呂の給湯器が壊れた。家族みんなをいやす風呂も時々、機嫌が悪かったり、疲れた今日も僕は風呂に入る。昨日より成長した自分が感じながら。

町に、「水人間」が現れ。彼らの外見は、人間とはそんなに違つなかつた。男も女もいたし、老人も赤ん坊もいた。違うのは彼らの目だつた。彼らの目は、とても深い水の色をしていた。吸い込まれそうな青だつた。その煙めきは見る者を魅了し、その深さは見者を不安にさせた。彼らがどこからやって来たのかは分からない。いつのまにか町にいて、いつのまにか職を得て、いつのまにか暮していた。

そのこともあって、町の人々は、水人間はそこから現れたのだよと噂した。月日がたつにつれ、水人間たちに対する風当たりは強くなつてついた。中には水人間を強く嫌悪する派も出だきた。町の人々は、水人間はそこから現れたのだよと噂した。町はそれに湖があつた。町の人々は、水人間に対する風当たりは強くなつてついた。中には水人間を強く嫌悪する派も出だきた。

水人間を嫌悪する人々は、無視する、仕事を回さない、などありとあらゆる嫌がらせをした。しかし、水人間達は顔色一つ変えなかつたので、そのことが余計に町の人々を苛立たせた。

そして、ある夜、何人かの人影が町はすれの水人間達の住む場所に入つてついた。しばらくすると炎があり、人影は走り去つてついた。町の人々はそれを見ていた。ただ見ているだけだつた。

いかつたせいで、終わつたのは夜だつた。水人間達はなかつた。消え失せたのだ。

町の人々は身体の知れない隣人がなくなつたことを嘆くつて思ひながら皆は帰路に着いた。だれかが叫んだ。湖のほうには、たくさんの人影が立つてついた。彼らの体はほんやりと青く光り、湖も同じ色に輝いていた。

水人間達は町の人々を見つめながら、無表情で一人ずつ湖に飛び込んだ。とほん、とほん、とほん、とほん…。町の人々は動けなかつた。最後の水人間が飛び込んだとき、水が渦巻きはじめた。人々は走り出した。恐怖の叫び声をあげて。しかしも追ひ。水が町を呑み込んだ。なすすべもなかつた。町の人々は、今までに呑まれようとしているとき、自分を見つめる青い煙めきを見たよう思った。

「あれ? あそこ、何しているの?」

一面緑の稻の海に、ぼつりと場違いな黄色いショベルカーがあつた。それのある田んぼは穴があいたように土色だつた。

「あれは、田んぼをやめちゃつたんじやないかな」

父の言うていることがよくわからなかつたので私は「どういううこと?」と聞き返す。

「おばあちゃんが、何百年も米を作つてゐるから田んぼになるつて言つただろう。逆に二、三年作らなかつただけで田んぼはもとの土に戻つてしまふんだよ」

それを聞いてショックだつた。たぶん江戸時代だつたら、田んぼがあるのは当たり前だつた。でも今は保つことも難しくなつてゐる。今の時代はパンも麺もある。それらはとてもおいしく大好きだ。でも、この水田の景色はなくなつてしまふのだろうか。初夏は水をたたえた田が広々と空を映し、夏には緑の海となる。とほんが飛び、蛙が泳ぎ、たくさんの命を育んでくれる私たちのふるさとは、永遠に失われてしまうのだろうか。

私はこの水田の景色が好きだ。一面の緑と自然に囲まれて暮らす祖母を見ていると、どんなに街の道路やビルや排気ガスの中で生きていても、やはり、人が心を落ち着かせ本来の姿を取り戻すのはここなのだと感じる。だから私は何十年後もこの景色を見ていたい。

水人間

関 稔

百年後の田んぼ

小柳 清香

今日も僕は風呂に入る。風呂に入りながら、いつも僕は考へとをする。今読んでいる本の結末はどうなるか、学校で学んだこと、友達と話したこと、その日に心が動かされたこと。風呂は僕にとって、自分の心を振り返り、リラックスする場所だ。

町に、「水人間」が現れ。

彼らの外見は、人間とはそんなに違つなかつた。男も女もいたし、老人も赤ん坊もいた。違うのは彼らの目だつた。彼らの目は、とても深い水の色をしていた。吸い込まれそうな青だつた。その煙めきは見る者を魅了し、その深さは見者を不安にさせた。

彼らがどこからやって来たのかは分からない。いつのまにか町にいて、いつのまにか職を得て、いつのまにか暮していた。

そのこともあって、町の人々は、水人間はそこから現れたのだよと噂した。月日がたつにつれ、水人間たちに対する風当たりは強くなつてついた。中には水人間を強く嫌悪する派も出だきた。

水人間を嫌悪する人々は、無視する、仕事を回さない、などありとあらゆる嫌がらせをした。しかし、水人間達は顔色一つ変えなかつたので、そのことが余計に町の人々を苛立たせた。

そして、ある夜、何人かの人影が町はすれの水人間達の住む場所に入つてついた。しばらくすると炎があり、人影は走り去つてついた。町の人々はそれを見ていた。ただ見ているだけだつた。

いかつたせいで、終わつたのは夜だつた。水人間達はなかつた。消え失せたのだ。

町の人々は身体の知れない隣人がなくなつたことを嘆くつて思ひながら皆は帰路に着いた。だれかが叫んだ。湖のほうには、たくさんの人影が立つてついた。彼らの体はほんやりと青く光り、湖も同じ色に輝いていた。

水人間達は町の人々を見つめながら、無表情で一人ずつ湖に飛び込んだ。とほん、とほん、とほん、とほん…。町の人々は動けなかつた。最後の水人間が飛び込んだとき、水が渦巻きはじめた。人々は走り出した。恐怖の叫び声をあげて。しかしも追ひ。水が町を呑み込んだ。なすすべもなかつた。町の人々は、今までに呑まれようとしているとき、自分を見つめる青い煙めきを見たよう思った。

「あれ? あそこ、何しているの?」

一面緑の稻の海に、ぼつりと場違いな黄色いショベルカーがあつた。それのある田んぼは穴があいたように土色だつた。

「あれは、田んぼをやめちゃつたんじやないかな」

父の言うていることがよくわからなかつたので私は「どういううこと?」と聞き返す。

「おばあちゃんが、何百年も米を作つてゐるから田んぼになるつて言つただろう。逆に二、三年作らなかつただけで田んぼはもとの土に戻つてしまふんだよ」

それを聞いてショックだつた。たぶん江戸時代だつたら、田んぼがあるのは当たり前だつた。でも今は保つことも難しくなつてゐる。今の時代はパンも麺もある。それらはとてもおいしく大好きだ。でも、この水田の景色はなくなつてしまふのだろうか。初夏は水をたたえた田が広々と空を映し、夏には緑の海となる。とほんが飛び、蛙が泳ぎ、たくさんの命を育んでくれる私たちのふるさとは、永遠に失われてしまうのだろうか。

私はこの水田の景色が好きだ。一面の緑と自然に囲まれて暮らす祖母を見ていると、どんなに街の道路やビルや排気ガスの中で生きていても、やはり、人が心を落ち着かせ本来の姿を取り戻すのはここなのだと感じる。だから私は何十年後もこの景色を見ていたい。